

歩びやアがれ。

ト引立てにかゝる。佐渡七、わなくして居て

佐渡 ア、コレノ頭、貴様にさう云はれては、誠に一言もない。お前の娘といふ事は知らず、ふとした慾で目論んだ仕事、どうぞ、不請して下さい。

甚兵 コレエ、うぬらにいゝやうにされて居る、甚兵衛だと思やアがるか。エ、おしの重たい禿頭め。サア、一緒に來やアがれ。

ト立ちかゝる。

佐渡 ア、御免なさい。コレ、權九郎どん、見て居る事はねえ。詫言を頼む。

權九 おれだといつて、貴様に一杯かたられたもの、どう詫言がなるものか。併し、甚兵衛どの、お前の娘に別條はなし、云は、こんな事があつたから、娘御も内へ歸つたといふものだ。どうぞ不請してやつて下さい。

はや それいな。殊に父さん、今宵はわたしが母さんの、祥月の速夜なり、あれ程までに詫言なら、堪忍してやりなさんせいな。

甚兵 イカサマ、われが云ふ通り、心ざしの速夜だから、料簡してやるぞ。きりく出て歸りやアがれ。

ト佐渡七を門口に突飛ばす。はうく起上がつて

佐渡 アイタ、併し好い速夜で此方の仕合せ。頭、又命日に参じやせう。

ト云ひ捨て駈け出す。權九郎慌て、跡を追駈け、花道にて佐渡七を捕まへ

權九 コレ、佐渡七、おれにまで、てんじやうを見せたな。それは仕方がないが、胸倉の三兩は、どうしてくれる。

佐渡 どうと云つて、斯ういふはめだ、仕方がない。

ト帯を解き、裸になり

男は裸百貫の抵當に、これでも取つて下さい。

權九 そんなら三兩の抵當に、この下馬を寄越して、裸で道中小揚げの佐渡七か。飛んだ乞食の獨り相撲だ。

佐渡 東西々々。

トこれより佐渡七、思ひ付の名乗を上げて、乞食獨り相撲のこなしよろしく、權九郎、佐渡七の單物を持ち、花ぶれを云ひながら兩人向うへ入る。

甚兵 エ、業曝しめら。

ト合ひ方になり、お早思ひ入れあつて

七三〇

はや 思ひがけなう父さんに、めぐり逢うたは嬉しいが、わたしが預かつたあの幼な子、あの佐渡七がどこへ里に遣つた事ぢや、マア、心が、りな事ではあるぞ。

甚兵 コレ、お早、久し振りで逢つたから、何から云はうか。去年てまへを連れて、箱根から出かけて来たも、品川の仁右衛門といふ親仁が、妾を尋ねるといふ事を聞いて、そこへてまへを遣らうと、戸塚まで来て、境木の地藏堂ではぐれた儘、今日が日まで影を隠したは、わりやア云ひ交した男でもあつて、妾奉公が否だに依つて、親の云ふ事をもどいて、駈落ちしたのか。

はや いかにもお前が云はしやんす通り、不思議な縁でいたづらな、ふとした男と云ひ交し、逢ふは逢うても暗き夜の、お顔もろくく所さへ、いづくの誰とも分らねど、お前が妾に遣ると云はしやんすが、しみく否さにその方と、駈落ちしようと思つて居る内、思ひがけなきその夜の騒動、怖さは怖し暗まぎれ、そのお方ぞと思つて連れられ、立退きし男、跡々にて詳しく様子を聞くに、わたしが云ひ交したお方とは違つた話し。恥かしいやら、面目ないやら、どうせう事も泣いてばかり。これといふも、親の許さぬ不孝の罰。モシ、父さん、堪忍して下さんせ。

甚兵 そりやモウ、憎い奴と云つた所が返らぬ事。して、それからその云ひ交した男に、わりや逢つた

か。

はや サ、それからちつと辛抱して、云ひ交したるそのお方に逢ふまでは、男は持たぬと情だつて、月日を送る其うちも、女子の世渡り知らぬ身の、難儀を見兼ねて、連れて退いて下さんしたそのお方が、ようくとわたしを、町家の夫婦暮らしの内へ、雇ひに遣つて下さんしてな。その内に子守り奉公して居る内、聞きなさんせ、わたしを世話して下さんしたその男が、奉公先のお内儀さんを連れて、駈落ちしたと思はんせ。それゆゑ御亭主様の云はしやんすには、其方を世話した男は、てまへの夫であらうと疑ひかゝり、わたしを見知り人にして、その男を尋ねると、御主人に連れられ、殊にその家の幼な子を預かり、世話になつたお方を尋ねる内、又もやフトした事にて、その御主人にもはぐれ、云ふに云はれぬ、これまで苦勞を致しましたわいな。

甚兵 それもてまへが心から。して、その子を預かつて一緒に歩いた、主人の名は何と云つて、何を渡世にする人だ。

はや 今は町家の微かな暮し、以前はたしか南與兵衛様といふお侍の御子息、長五郎様といふお方の幼な子を預り、所々方々連れられます其うちも、互ひに枕は交さねど、世間の手前は女夫のふり甚兵 ヤ、その南與兵衛の伴長五郎といふは、菊池家の侍ひだが、そしててまへ、その長五郎といふ人

七三一

に、いつ頃別れた。

はやサ、七月廿四日の頃、六郷とやらの渡し場にて

甚兵ムウ、そんならいよく廿六夜に、袖ヶ崎にて人知れず

はやエ。

甚兵 コレ、お早、おらアてめえに先刻から、聞かうと思つて居たが、てめえの顔の疵は、何で付けたのだ。

はや これにも段々申し譯の有る事。かいつまんで申さうなら、主人の爲に、是非なう疵を付けましたいな。

甚兵 成る程、男でも女でも、この世へ生れて出て、苦勞をしない者はないものだ。コレ、今日速夜の佛てまへのお袋は、橋本治部右衛門といふ侍ひの家に、乳母奉公して居たが、橋本の家も退轉したといふ事。てめえ、その時の事を、ちつとは覚えて居るか。

はや アイ、幼い時の事なり、お顔はろくく、覚えねど、母さんが乳を上げたお子の名は、お照様と申しました。云は、わたしは乳兄弟、どこにどうして居やしやんすやら。

甚兵 水の流れと人の身の、行末は知れないものよ。一體てまへを産んだ母は、後添ひの女よ。先妻の

腹にも、男の餓鬼が一人あつたが、末の榮華と、主人の子と入替へ子。

はや そんならわたしには、腹替りの兄さんがござんしたかえ。

甚兵 有りは有るが、これも今では浪人して、どこの何處に……ア、悔んで歸らぬ事ながら、悪の報いの二昔し。

はや エ。

甚兵 コレ、明日は暁アが祥月命日、その速夜の今日といふ今日。

はや 久し振りにて父さんに、お目にかゝるも母さんの、お引合せでござんせう。

甚兵 それよ。おぬしも久し振りで、母の位牌に逢ふであらう。奥の佛間で

はや 香花を取つて

甚兵 回向をしやれよ。

はや アイ。

ト兩人こなし。唄になり、お早思ひ入れあつて奥へ入る。甚兵衛残る。聖天になり、向うより長五郎、前幕の形、一本差し、權七が襟髪を掴み、片手に小立の小袖を持ち引立て出て来り、花道にて

權七ア、モシく、何も存じませぬ。御免なされませく。

長五 われには詮議があるぞ。サ、眞直に云へサ。この小立は、どこで買つて来た。

權七 アレ／＼、あの駕籠屋の内で買ひました。

長五 懸りの合ひだ。一緒に来い。

權七 これは迷惑な。

ト兩人門口へ来て

長五 サア、偽りなくば持つて入れ。

ト小立を渡す。

權七 アイ／＼、ナニ嘘を云ひませう。

ト内へ入る。

モシ／＼、こりやア今お前の内から、買つて行きましたぞよ。

甚兵 さうサ。それがどうした。

權七 モシ／＼、お聞きなされる通り、この小立は、爰の内から出ましたよ。

長五 モシ、御亭主、いよく左様かな。

甚兵 アイ、違ひござりませぬ。

ト合點の行かぬ思ひ入れ。

權七 ヤレ／＼、そんならわしは肩が抜けました。僅かな物で

ト跡をも見ず向うへ駈けて入る。長五郎思ひ入れあつて

長五 すりや、こなたがこの家の御亭主か。

甚兵 左様でござります、駕籠屋の甚兵衛とは、わしでござりまするが、お前様は何の御用で

長五 わざ／＼参つた私しは、長五郎といふ者でござりまするが。

甚兵 エ、長五郎様といふ。

トお早が話しの男、又は殺せし男と目を付ける思ひ入れ。

長五 イヤ、別儀でもござらぬ。話せば長い事ながら、かいつまんで申さうは、乳呑み子を一人連れまして、女に抱かせ、尋ねる者のごさるゆゑ、所々方々と流浪の中、六郷邊にてその女にはぐれました。その女の行くへをと、今日までも尋ねるこの邊。その幼な子が着て居つたこの小袖、古鐵買が持参ゆる、出所聞けばこの内と、申したゆゑに尋ねに参つた。幼な子御存じあるならば、定めて預けし女の行くへも知る、道理。それで参つた、甚兵衛とやら、御存じならば教へて下さい。

ト甚兵衛思ひ入れあつて

甚兵 尤ものお尋ねだが、わしが内にもたつた今、拾つた小立と持つて来た、慥かな者がござるゆる、
うか／＼とその小立、籠襦袢買に賣りましたが、それがどうしました。

長五 小兒を預けし女の詮議と

甚兵 イ、エ、そこまでは存じませぬが、それを詮議と仰しやれば、此方にも又聞きたいものが

ト長五郎が紋所へ、よく／＼目を付け、今讀ませしお觸れ書を取り出し

コレ、お若いのお恥かしいがわしは無筆だ、このお觸れを讀んで見て下さい。

長五 すりやアノこれが

ト披き、口の内にて讀み

この觸れ書は由留木橋にて、廿三四の男の横死、討つたる者は、これも年頃その通り、杏葉牡丹
の紋と、野伏りどもが確かの訴へ……すりや、その相手の紋は牡丹の

ト間違ひし手前の紋を見て

一宿泊りに替りし着類。

甚兵 杏葉牡丹の紋所、それを着て居るお若いのお、廿三四の年の頃、割符も丁度

ト長五郎へ目を付け

切 六 七



逃けたというて天の網、このお觸れでは

長五 ヤ。

甚兵 一服上がりませ。

ト 眞盆を差付ける。長五郎思ひ入れ。合ひ方。奥よりお早、茶を汲んで来る。

はや お客さうなに、お茶も上げいで。ハイ、召上がりませ。

長五 これは構はつしやるな。

ト 茶を取らうとして顔見合せ

はや ヤ、お前は

長五 どうして爰に

ト 悔りするはずみ、お早茶碗を取落し

はや よう尋ねてお出でなされました。お前にはぐれて、わたしや大抵、お尋ね申した事ぢやござりませぬに、ようお出でなされて下さりました。

長五 わしもそれからこなたの行くへ、所々方々と尋ね歩き、手がかりあつて只今爰へ……こなたが爰に居るゆゑに、小立の小袖も……ア、それで分つた。

甚兵 ア、コレ、お若いのが、分つたと云はつしやるが、この女は、この小立を着た、小さいのは連れませぬよ。

長五 エ、アノ、乳呑み子は

トお早小立を見付け

はや ヤ、こりやあの子の小立が。

長五 コレ、こなたに預けた、彼の子はどうした。

はや 先程までも抱きかゝへ、わたしを世話して彼の子にも、乳も吞まさうと眞實に、云うたお人へ渡した儘、そのお方も彼の子を連れて

ト思ひ入れ。長五郎せいて

長五 コレくく、あの幼な子は、おれが子なれば失うても、そりや濟まさぬとも云ふまいが、知つての通り譯ある小兒。今にも二人に逢うたりとも、存分云ふには肝心の、捨て置いたを拾ひ取り、養育したも甲斐がない。して、預けたる男は何者。

はや 川崎宿の小揚げとやら

長五 それが分れば、その者を尋ね参つて

ト門口へ出ようとする。甚兵衛、すつと立つて門口をしやんと締め

甚兵 イ、ヤ、遣られぬ。

長五 尋ねに行くを、なんで遣られぬと。

甚兵 聳に取りたい。

長五 ヤ。

甚兵 こなたはこれなるお早が素性を、知つてござるか。

長五 只今参つて、未だ様子も

はや お存じないも御尤も、かねくお話し申したる、去年戸塚の境木で、はぐれたわたしが實の父さん。

長五 すりや、このお人が

甚兵 このお早とはわしが娘、まだ總領もござれども、様子あつての他家への養子。妹娘のこの女、今日思はずも親の内、來たのが幸ひこの家の跡取り。娘が話して詳しい様子、聞けばいろく、込入つた譯ゆる、二人連れ立つて歩けど、夫婦でないといふ、枕交さぬこなたでも、今まで恩を受けたるお早、娘が心に染ますとも、舅のわしがこなたに惚れた。親が戀聲、それといふのも道樂な、

息子の爲には好い片腕。片棒昇く氣でこなさんも、肩釣合はぬ身ながらも、お早が兄の棒組に、不請であらうが駕籠昇きの、聳になつてはくれまいか。

長五 折角主の頼みでも、數へて見れば二年越し、一所に居ても日の内は、女夫と見せて肝心の、夜は互ひの他人向、それを主が聞きながら、聳に欲しいと云はれても、外に枕を交した女、今にも廻り逢ふ時は、添はねば成らぬ女房がござる。さすればどうも、お早どのは

はや わたしも同じ男の行くへ、尋ね逢ひなばその方と、女夫の結びを願ふ身で、外に男を持つ時は、操を捨てしいたづら女、親の詞もこればかりは

甚兵 ならぬとあれば娘は格別、縁が無ければ若い人、こなたはこの家に居られまい。併し表へ一寸でも、出たならお觸れの人殺し、杏葉牡丹の紋付では

はや すりや、人殺しのお觸れがあつて
甚兵 こなたが見たる、コレこの觸れ狀

ト投げて遣る。お早取つて、よく見

はや ほんに年頃似寄りのお前、殊には思はぬ定紋の、變つてあるも、何やら氣遣ひ
ト思ひ入れ。このあたりより小屋根へ長吉、筵と屋根板を持ち出て來り、引窓のあたりへ筵を敷き、

金襴を出して屋根にかゝる。

甚兵 それだに依つて、入り聳になるのがよからう。

長五 成る程、主の心遣ひ、さは存ずれどソレその小立、こなたが失ふあの子の行くへ。

甚兵 それも知れるは今の間に、小の虫より大の虫、そこを思つて勸める入り聳。

長五 娘御お早の得心ござらば

はや それも常から云ふ通り、道を守つて一つ寢を、せぬ心なら詞を立て、

甚兵 おぬしが親の云ふ通り、得心すればこの人も、一つ寢をせぬきほにして

長五 役に立たずと駕籠屋へ聳入り。

はや 夜のお間には合はねど花嫁。

甚兵 得心すれば幸ひ爰に

ト合ひ方になり、竹花生に入れし菘薄、小桶に洗ひかけし蛤、三寶の神酒を取出し、佛壇より位牌を持つて來り、三寶の上へ置いて茶碗を添へて

お早が爲の實の母、生きて居たなら悦ばう。恰度祥日速夜といひ、祝言するには大吉日、月見の薄は、臺代り、砂をはませる。蛤は、なくて叶はぬその夜の吸ひ物、冷酒の神酒をいたゞきて、

夫婦の固め三々九度。

はや そんならわたしや母さんの、位牌の前で添ひ寝せぬ、その云ひ譯で持つ男。
長五 顔は知らねど契約の、女に立つる水臭い、聳と承知で杯を、女の方から
はや わたしが飲んで

ト茶碗を取上げる。

甚兵 釋迦の開帳ならねども、三國一ぢや、聳取りすまいた。しやんくのしやん。

ト甚兵衛手を打つ。長吉は引窓より覗き居る。棚の四つ手駕籠の内より、お照垂れを上げて窺ふ。この影、蛤を漬けたる桶の水へ映る。甚兵衛が手を打ちし納りに、長吉、持つたる鐵槌を引窓より落す。長五郎取つて

長五 上から危ない

はや 女中の影が

ト桶の中を覗く。

長五 映るは慥か

ト桶を見ようとする。

甚兵 砂をはませて

ト手早く蛤を摺り鉢へ明ける。これにてお照垂れを卸す。

長吉 慥かに濡髪。

長五 覗くは正しく

ト行かうとする。お早留めんとする。立廻りにて柱に結びし引窓の綱を思はず解いて留めんとする。これにて窓は、ぐはらくと縋り、内は暗くなる様子。この途端に駕籠の垂れ障り、柱に懸けし札守りの箱の内より一軸落ちる。

はや こりやコレ慥かに

ト目を付ける。

甚兵 暗くて様子が

ト綱を取つて引く。引窓明く。このはずみに長吉、屋根より之り落ちし體にて、件の懸け物の上へどつさり坐る。

長五 さてこそ長吉

トお早を振退けかゝるを

長吉 南無三。

七四四

ト卸してある四つ手駕籠の内へ駆けこむ。甚兵衛垂れを下す。長五郎行きにかゝるを、お早留める。右の一軸落ちてある。

長五 慥かに尋ぬる

ト取りにかゝるを、お照駕籠の内より飛び下り、一軸の上へしやんと坐る。長五郎見て

假の女房か。

てる 偽り者とも

長五 ようも騙して

ト刀へ手を掛ける。長吉飛んで出て、お照を引廻し、落ちたる一軸を懐中して

長吉 間男同然。

長五 云はゞ女敵。

兩人 うぬ。

ト長吉は有合ふ出刃、長五郎は一腰へ手を掛け立ちかゝるを、お早、お照立廻つて二人を留める。甚兵衛この中へ入り、又ぞろ引窓をしやんと引く。窓締め暗くなりし體、四人は左右へ別れて見得、

爰にて誂への合ひ方に變る。

長五 我れを偽るあのお照、小兒を捨て、長吉と、駈落ちしたるいたづら者。また長吉も侍ひの、道を忘れて濡髪が、心底づくにて頼まれし、枕交さぬ女房を、連れて逃げれば女敵同然。それを庇ふは舅どの、所存あつてか、サ、それ聞かう。

甚兵 わしが留めたは譯もなく、コレこの位牌の一周忌、しかも取分け速夜ゆゑ、現在俄の花簪さん。他家で育てど、この長吉、わしが惣領。佛へ對して討たれまい。そこで親仁が留めたのサ。

はや そんならいつぞやお世話になつて、長五郎さんのお宿から、行くへなうならしやんした、今日まで尋ねる長吉さんは、わたしが兄さん。よくもお世話になつた内、主のあじやらをいろくと、云ひ譯したが今の仕合せ。

長五 イ、ヤ一旦亭主ぞと、世間へ云うてくれとある、それを頼みしこのお照、この長吉との駈落ちはてるわたしも尋ぬるそのお方に、廻り逢ふまで世間の聞え。夫となつて下さんせ、若しも尋ぬるそのお方に、廻り逢うたらその時は、それを亭主と打明けに、云うて頼みし長五郎さん、長吉どの、邪まから、口説くを聞かねど今更に、わたしが頼みしお前へどうも

長五 家出したので云ひ譯あるまい。内證事の譯は格別、世間の人は女房と、思うて居れば間男に、女

七四五

を盗まれ乳呑子まで、捨て、行きしと世上の嘲り。面が立たねば是非なくも、女敵なりと

長吉 討てば此方も女敵だ。女の頼み是非なくも、表向での假女房、近所の弘め人別も、女房と印形据ゑたるお早、現在おれがあゝの屋根から、聞くととも知らず祝言の、杯してはこれ間男。

はや イエ、それもこなさんが、長五郎さんへ雇ひ女にわたしをやり、お照さんとの駈落ちゆるゑ、思はぬわたしも疑ひ受け、乳呑子を抱いてお前の行くへ、尋ぬる爲にわたしは人質。生れもつかぬこの志は、なんほわたしが様な者、よもやと思へど思案の外、そこを思つて此やうに、手づから顔へ付けた志。

長吉 口賢く云ひ抜けても、それも大方男へ心中、顔へ付けたる志であらうワ。
はや エ、こなさんもそれ程までに

長五 おれに於てはこれ程も、曇り霞みはなけれども、長吉われがあゝの内に、お早を隠まひ置いた内、いたづらがましき事あれば、二人は畜生。

長吉 そりや又なんで畜生だ。

長五 聞けば二人は兄弟と、親の口からたつた今

はや よし兄弟でも親子でも、誓ひを立つて長吉さんに

長吉 添臥しせねば、なんで畜生。

長五 畜生ならぬ長吉でも、假の女房のこのお照。

てる わたしも主に何のマア

甚兵 兩方一ツ寢せぬならば、不義、女敵とも云はれまい。

長吉 でも女から頼みし夫。

長五 互ひに枕交さねど

長五 武士と見込んで頼まれし

長吉 刀の手前。

長五 女敵を討つたる跡にて、手に入る一軸

長吉 龍虎の二幅は揃へておれが

長五 イ、ヤ斯く云ふ長五郎。

長吉 イヤ長吉が歸參の種に

長五 われが一軸此方へ渡せ。

ト兩人互ひに持つたる一軸を引合ひ争ふ。お早お照心遣ひ。甚兵衛この中へ入つて

甚兵 武士の意地づく尤もながら、云は互ひに雇はれ亭主。二人の女が思ふ男は、どこにどうして居るやら、知らぬが佛の今夜の速夜に、産土祭り。どちらへ轉けても見遇しに、この甚兵衛が預かりました。長五郎さん、長吉、おれに任せて

長吉 こなたの挨拶。わしらはどうでも

長五 この長五郎も假初めの、舅と云うたこなたの頼み、今宵の所は

甚兵 それではわしも落付いた。かたの付くまで見苦くとも

長五 こなたの内に足を留め、それといふのも小立の行くへを

ト小立を見せる。

てる そんならあの子の

はや わたしが連れて

甚兵 來たと云うても迷ひ子に、ならぬ乳呑み子觸れ書の

長吉 杏葉牡丹の紋付は、人をあやめた

ト長五郎へ思ひ入れ。お早留めて

はや 思はぬ間違ひ疑ひを、受けぬその間に、ちよつと着換へて

ト風呂敷包みを差出す。長五郎取つて

長五 大方こなたの着換への浴衣。

はや 行丈揃はぬ女子の着替へ。

甚兵 われも今夜はお祭りだけに

長吉 お照が着替へのこの浴衣、似合はぬまでもこれなりと

ト駕籠に付けてある風呂敷包みを取る。

てる 派手な模様の菊蝶と

はや 扇蝶とのこの浴衣。

長吉 着替へて後に

甚兵 ア、コレ、お客は二階の蚊帳の内、また長吉は今夜は店の、二階に吊つた紙帳で夜とも

はや 云は思はぬ間違ひも、わたしら二人が頼みし女夫。

てる それが遺恨と龍虎の争ひ。

長五 その一軸を取り得るか、

長吉 また女敵と討たるゝか。

甚兵 討ち討たる、は武士の常。
はや たとへの通り討つ者も
長五 討たる、者も土器の
てる 碎けて元の土くれと
長吉 割れては後に
甚兵 コレ。

ト茶碗を二ツ差出す。長吉、長五郎取つて兩人一度に
長吉 人も、茶碗も

ト打付けて割る。甚兵衛手早く割れた茶碗を取つて
甚兵 そこを一番、瀬戸物やきつぎ

はや 割れた茶碗を
長吉 ついで見せるは
長五 細工は流々。

ト引窓の綱を引く。戸は明く。皆々顔見合せ思ひ入れ。長吉、長五郎詰寄るを、甚兵衛また綱を引く

今度ば引綱違つて反古で貼つたる障子を引く。思ひ入れあつて
仕上げを見さつしやりませ。

ト唄になり、長吉は風呂敷包みと一軸を持ち、下の二階へ上り、紙帳の内へ入る。長五郎も一軸と包
みを持ち、上の二階へ上り、蚊帳の内へ入る。お照は暖簾口へ入る。跡合ひ方、お早、甚兵衛残る。
二階の簾下りる。

ア、もう暮れたか。コレ、その二階に瓦燈があるから、それを灯すがい。コレ、長吉、八幡
様の提灯も灯してくれろよ。

はや 下へも行燈を灯しませう。
甚兵 さうしてくれろ。

トお早、行燈へ火を灯す。
この中あの由留木橋にて、長五郎を

トお早へ思ひ入れあつて
そんならあの時人違ひ、よもやと思つた長五郎が、蘇生して来たのか。何にしろその時の
ト此うちお早、卓の上に燈明をともし、萩薄、片脇より團子の盛りたる三寶を持ち來り備へる事。

甚兵衛手に入りし守り袋と其入れを出す。その時其入れの中より扇蝶の簪落ちる。

はや 長五郎さんより預つた、あの幼な子を見失うたはわたしが過り。殊に氣早な長五郎さん、お照さんの事につき、若し刃傷に及ぶ時は、討たるゝ男はわたしが兄さん、それを知りつゝその儘に甚兵衛コレ、何も苦勞にする事はない。これを讀んで見やれ。

ト守り袋を出す。お早取つて

はや アイ。こりや守り袋でござんすな。

甚兵衛 ちよつと讀んで見やれ。

はや 相州箱根の住山崎與次兵衛倅與五郎。

甚兵衛 ヤ、ナニ與五郎、アノ、山崎氏の

はや アイ、さう書いてあるわいな。

甚兵衛 ヤ、い、い、い、そんなら討つたる侍ひは、アノ山崎の與五郎なれば、入替へ置いた實の倅め。

はや エ、入替へ置いたと云はしやんすは

甚兵衛 サ、入替へ置いたと云ふのは……ア、何よ、アノ山崎といふ質屋へ入替へて置いた、コレこの簪。

ト見せる。お早取上げ見て

はや ヤ、こりやコレ、わたしが去年まで、差して居たこの簪。
甚兵衛 ドレ、見せろ。

トよくく見て

成る程こりや、われが差して居た扇蝶の紋付きの簪。それが廻りくつて、あの品川の丸本で

ト思ひ入れ。お早猶々合點の行かぬ思ひ入れ。

はや モシ、父さん、その簪はどうしてマア、お前持つて居なさんすえく。
ト甚兵衛思ひ入れあつて

甚兵衛 その簪の事はどうも滅多に……コレく娘、われも又この簪を、去年おれと道中した時まで差して居たが、それをどうして、今更其やうに

はや サ、最前もお前にお話し申しました、云ひ交したるそのお方へ、後の證據と渡したは。モシ、その簪でござんすわいな。

甚兵衛 コレ、娘、誠にわりやこの簪を、その暗がりて知らぬ男に
はや アイ、そのお方を尋ねんと、今に苦勞を

甚兵 逢はせてやらう。

はや エ、尋ねる男に。

甚兵 逢はせて遣らうがその代り、おれが回向を

ト出刃を取つて

南無阿彌陀佛。

ト死なうとする。お早執付き

はや コレ、氣が違うてか。なんでお前は

甚兵 氣も違はいで、甚兵衛は、好い年をして畜生道へ。

はや エ、そりや又なんで

甚兵 われと寝たゆゑ。

はや エ、

ト大きに驚く。好みの合ひ方。

甚兵 馬鹿な話しも身の懺悔、去年てまへと連立つて、戸塚の宿の泊りぞと、思つたその夜は境木の、地藏祭りて旅人の込合ひ、宿を尋ねに短か夜を、彼處や此處と夜を更し、殊にてまへも見失ひ、

野宿の床と地藏堂、入つた所に臥したる女、小つ耻かしいが無理口説、その暗やみが因果の始り、女の方からくれたる簪、紋は似寄りと云ひながら、よもや娘のてまへとは、思はなんだが今の話し、それちやア違はぬ親子のどれ合ひ。必ず人に沙汰するな。南無阿彌陀佛。

ト死なうとする。お早留めて

はや イエくく、そりや違つた。よもやお前に其やうな、悪いたづらが。サ、なんほ間でも暗がり

でも、お年の上の父さんと、若いお方と手の觸りも

甚兵 イヤく、そりや親と聞き、手前が庇ふ心でも、拔差しならぬこの簪。殊にその夜に耻かしい、

どうしたはずみか若い女を、いたづらしたは

トお早を見て

何たる因果だ。

はや そんならどうでも簪の、證據があるゆる親と子が

甚兵 畜生同然、人間の、皮を被つた犬猫だ。娘、放して、殺してくれろく。

はや イエく、滅多に殺されませぬ。お前にばかり畜生の悪名付けぬ。わたしも一緒に。どうで死なればならぬ譯。あの預かりの幼な子を失ひ、殊に添臥しせぬけれど、長五郎さんのお心ざし。優

しいお方と心の迷ひ、亂れ心も有る時は、その簪を渡したる、お方へ立たぬ事ゆゑに、わたしもお前と冥途の道連れ。

甚兵 それでは却つて親子の心中。併し悴の長吉が、連れて歸つた彼の女、橋本氏の娘のお照、云は、われとは乳兄弟、彼の子の乳母は今夜速夜の

はや あの母さんの育てし娘御。さすればわたしがお主筋。

甚兵 以前は若黨竹右衛門、おれは山崎、女房は、橋本氏へ乳母奉公。今では六十近き身の、死耽無きやう幸ひ爰に

ト吳服葛籠の上にある四ツ手文庫に包みし品々を取つて

祭りの誂へ派手向の、これを着替へて黒油、いづくの誰が染めしやら、頭の雪も今よりは、墨黒黒と墨染の、法衣にあらぬ派手男。

ト最前櫃七が置いて行きし鬢盥の内より黒油の入りし蛤貝を出す。

はや わたしも親と心中の、悪名立たぬ其やうに、眉毛落してこの鬢も、老けた姿に見せるのは、丁度幸ひ誂への、帯も着類も年増風、今宵速夜の母さんの、姿となつてお前と一緒に

甚兵 それで世間の口塞ぎ、若やぐ親に

はや 老けたる娘、顔を直して

ト件の紙包みの帯着類を出し、在合ふ鏡臺、鏡、剃刀、砥石を出し、鏡を見て

甚兵 生れも付かぬ顔の疵。

はや 長五郎さんに連れられて、女夫にあらぬこの身の潔白、それが却つて情ない、思はぬ親子の心中と

甚兵 浮世の人の口の端に

はや かゝりや繋がる

甚兵 娘と親の

ト兩人顔見合せ

はや 思はぬ悪縁、

甚兵 コリヤ。

ト思ひ入れ。これより獨吟になり、お早剃刀を出し砥石にて合せ、甚兵衛鏡臺に向ひ行燈を照し、黒油を出し髪を塗る事。この時二階の簾上がる。長吉撥巻を着て、軒口に八幡宮といふ祭りの丸提灯吊しあり、長五郎これも古き撥巻を着て、瓦燈に火を燈し、蚊帳の前にて兩人とも下を窺ひ居て

長吉 ばらしたと聞く長五郎、思はず爰へ来たからは、そんなら正しく人違ひ、今宵の内に討つて捨て所持する一軸奪ひ取つて、二幅揃へて本領安堵、その時こそは養子親、家名も南方十次兵衛。
長五 あの長吉が所持する一軸、不義に事寄せ切つて捨て、一軸手に二幅對、龍虎揃へば本地へ歸參、その時こそは南與兵衛、改名なして先祖の名跡。併しこの程不思議にも、手に入る一卷、改むれば、山崎氏の、こりやこれ系圖。

ト系圖をちよつと出す。

長吉 實の親仁の甚兵衛が、聞かぬその間にばつさり

長五 假の舅に知らさぬやうに

長吉 白刃と

長五 白刃の

兩人 互ひの勝負。

長吉 この一軸も目立たぬやうに

長五 隠す所は

ト長五郎一軸を蚊帳の内へ入れる。長吉一軸を紙帳の内へ隠す。

はや 今宵限りの

甚兵 親子の心中。

はや 未來永々

甚兵 これが迷はで

長吉 ヤ。

トお早、行燈を吹消す。

はてなア。

ト思ひ入れ。チヨンと下家へ簾下りて二人を消す。又獨吟になり、左右の二階にて、兩人一腰を取出し提灯にて白刃をよく見。此方も瓦燈にて見る事。唄切れる。兩人一度に燈火を吹消す。時の鐘、凄き合ひ方。長吉、長五郎、窺ひく下りて來り、長五郎は下の二階へ窺ひ行き、長吉は上の二階へ窺ひ上がり、深り見て蚊帳の吊り手、紙帳の吊り手、双方一度に切つて落す。いつの間にか此うちに兩方とも人在る様子。さてはと兩人思ひ入れ。蚊帳と紙帳を突き通す。内にて苦しむ様子にて蚊帳と紙帳を被りし儘兩方一度に、左右へ見事に飛び下りる。兩人も續いて飛び下り、双方探り寄つて又ぞろ突く事。爰にて長吉、長五郎、たぢくとして後合せに脊中當つて、惘りして

長吉 ヤ、手應へしたる蚊帳の内
長五 さう云ふ聲は長吉か。
長吉 濡髪、われも存命か。
長五 助け置かれぬ。
長吉 われも此世の

ト立廻り。兩人の搔巻脱げる。長吉は菊蝶を大きく染めたる派手なる浴衣。長五郎は扇蝶を染め出したる好みの浴衣。兩方とも女物にて派手なる裏襟、廣袖仕立にて、きつと見え。これより華やかなる鳴り物。兩人タテよろしく、ト、奥よりお照、行燈を提げ、つかくと出て、この體を見て

てる お二人、待つた。
兩人 邪魔すな、女。

ト引退ける。お照在合ふ二枚折の屏風を取つて二人を留める。兩方より蝶紋を切つて二枚に分けるお照屏風の片しを取つて二人を留める。尤もこの屏風に菜種に菊蝶の模様ある扇の地紙、貼交ぜあるてる マア、待つて下さりませ。

トきつと押へる。この時蚊帳と紙帳の内にて

はや 手に入る一軸濡髪さんへ
甚兵 悴長吉、互ひに仲好う
二人 ヤ、さう云ふ聲は

ト蚊帳を破り甚兵衛、紙帳を破り、お早、件の一軸を持ち、甚兵衛は大綿の浴衣、新縮緬の襦袢、頭も黒く若やぎし體にて手負ひ、お早は髪も亂れ、眉毛を落し、齒を染めし體にて、衣裳を着替へ、前帯の女房の形、これも手を負ひ、一軸を持つて、よろほひ出る、三人見て

てる ヤ、、お早さんは手を負うて

長五 甚兵衛とても深傷の様子。

長吉 さては長吉。

長五 この長五郎。

てる お二人さんに代つて感悟の

はや 死ぬる臨終にこれなる一軸。

甚兵 手栴は互ひに、めい、分つて

トお早は持つたる一軸を長吉へ差出す。甚兵衛は長五郎へ一軸を差出す。兩人取つて

長吉 心盡しの

長五 二人に免じて

ト兩人白刃を納める。

甚兵 それでは割れた茶碗も元々。元の姿に若やぎしは、濡髪殺してこの一軸、取得んものと思ふ惡念報い來て、手に掛けたるは、主人の子息の與五郎どの。

はや わたしが母は橋本の、お照様に乳を上げし、乳母が夫はこの父さん、お照様こそわたしがお主、若し女敵と過ちあらば、代つて死ぬる身の覺悟。以前の母さん、乳母の姿をその儘に

甚兵 親と娘が云ひ合せ、昔の夫婦の形をその儘、以前の幻竹右衛門、悴にあらぬ山崎の、與五郎様とはこなたの事、證據の守り。

ト差出す、長吉取つて

長吉 この長吉を與五郎とは

甚兵 以前勤めた私しが、こなたの誕生なされた時、わしが悴と入れ替へ子。その天罰が廻り來て、あの宿屋にて着類の間違ひ。濡髪なりと思ひ詰め、殺したお方は與五郎どの、よく／＼思へば實の餓鬼。我が子を我が手に殺しても、その名は與五郎、主人の御子息。退引ならぬ主殺し。さはさりな

がらお家の系圖。

長吉 すりや、長吉は誠の與五郎。

長五 與五郎ならば六夜の夜、不思議に拾ひし山崎の、系圖はこなたに

ト出して渡す。長吉取つて

長吉 辭退に及ばず、然らば一卷。

甚兵 それさへあれば、お家の跡目。親は斯様に若やぎて、この長吉が身に代り、長五郎どのに討たる覺悟。

はや わたしが所持の簪の、譯を聞くほど

甚兵 その夜の男は慥かにこなた。覺えがござるか。

ト右の簪を差出す。長五郎見て

長五 それぞ戸塚のわざくれ事。その時女が渡せし品、紋は即ち扇蝶、今に行くへの知れざる女。はや ヤ、その簪を御存じあらば、その夜にその品渡せしわたし。すりや此やうに戀ひ慕ひ、貞女を立てし殿御といふは

長五 暗がり紛れに女の間違ひ、尋ね逢ひなば女房と、思ふ女は

はや ほんにお前で

トお早、長五郎 恠りする。お照こなしあつて

てる すりや、簪の證據より、顔の知れざるお方がどうやら

ト長吉 投げちらしある屏風の張交を見付け

長吉 ヤ、この張交の地紙の模様、菜種に狂ふ蝶々の、女扇は、慥かにいつぞや

トよくく見て

コレく、これだ。菊を直して揚羽の蝶に

てる エ、わたしが覺えの、扇がどこに

長吉 覺えがあるか。

ト屏風を見せる。お照見て

てる こりやこれわたしが暗き夜に、殿御へ渡せし扇の模様。

長吉 そんなら去年噴木の、地蔵祭りのその夜半に

トお早長五郎もこなし。

長五 此方も境の地藏堂。

はや お顔は見ねど心の誓ひ。

てる 證據に渡せし菊蝶の

長吉 女扇は失つても、廻り／＼て張交に

長五 交かへしたる女夫と女夫。

はや 尋ねし殿御は矢ッ張りお前。

てる 嫌うた男はわたしが尋ぬる

甚兵 菊の扇の長五郎、長吉。

はや お前であつたか。

長吉 こなたであつたか。

甚兵 知らぬ事とて女敵、間男。

はや 危ない縁で

長吉 あつたなア。

ト思ひ入れ。お照散ばりし小立を取上げ

てる ヤ、残し置きたる幼な子の、小袖が爰にあるからは

長五 その幼な子はお早が最前
 はや 見失うたはわたしが過り、その云ひ譯は命一ツを
 長吉 して、幼な子とは其方の腹に
 てる 一度契りし情のおどもり。お前の實子。
 長吉 ヤ、、、さうとは知らず僅なる、金に目がくれ預かつて、殺した餓鬼は、ホ、、、ホイ。
 てる すりや、その幼な子を、アノこなさんが
 長吉 現在親が

ト思ひ入れ。この時隠し置きたる器の内にて幼な子頻りに泣く。長吉駈寄つて蓋を取る。息吹返せし
 體。長吉思ひ入れあつて

まだ死断らぬも恩愛の、親子の情愛。コレ、この子であらう。

ト照へ渡す。

てる 可哀や今まで

ト抱上げてこなし。この時佐渡七、権九郎、囁きく出て來り 門口に窺ふ。

甚兵 互ひに知れた二女夫、逢うたる上は

はや 暇もらうてわたしは冥途へ。
 長五 男やもめの長五郎、今より家名も南與兵衛。
 長吉 南方氏の某も、今よりしては山崎與五郎。
 てる 以前の馴染に兄弟同然。
 長五 世話に碎けて長吉、今から
 長吉 念頃あひの長五郎。
 兩人 互ひに仲好う。
 はや 睦し月の月魄も
 甚兵 今宵の名月、めでたうこの上。
 長吉 誠の親の敵は倉岡。
 長五 こなたの腰押し、おれも助太刀。
 甚兵 丈左衛門は未明の出立。
 はや 必ずともに
 長五 合點だ。
 長吉

ト裾をからげる。

権佐 先刻の女を

トかゝるな長五郎、長吉兩人を押しやる。この時空へ満月現れる。この月明りにて引窓の障子の文字、あり／＼と見える思ひ入れ。

長五 ヤ、月の光りにあり／＼と、見ゆるは、慥かに一軸に

長吉 添へてあつたる正しく折紙。

てる 外にも怪しき反古の文字は

はや 丈左衛門と、アレ／＼、あり／＼見ゆるは

甚兵 綱を拂つて

長吉 詮議の手が、り。

権佐 それを

トかゝるな立廻つて兩人一度に抜くより早く綱を切る。この機みに件の障子ばかり落ちる。兩人見て

長五 さてこそ折紙。

長吉 丈左衛門が悪事の密書。

トお照見て

てる 橋本氏を毒害とは、父さんまでを倉岡が

長吉 重なる遺恨は丈左衛門。

長五 片時も早く

ト兩方へ行かうとする。お早思ひ入れあつて

はや 死ぬる臨終に、せめて女夫の

甚兵 娘が願ひ。

長五 未來で添はう、女房お早。

はや 嬉しうござんす。

甚兵 それを土産に

トお早と顔見合せ思ひ入れ。

てる モシ。

ト寄るな

權佐 われを代りに

トかゝるを長吉、長五郎兩人を捕へ緊上げる。甚兵衛、お早「ムウ」と苦痛の思ひ入れ。これを木の頭。赤子泣く。お照いぶり付ける。これをきざみにて、よろしく拍子

幕

引付けると捨て鐘、波の音にてツナギ。引返し。

本舞臺、向う打抜き、遠目に見たる海面、よき所に大船大分、萱すゝきしげり、鈴ヶ森の景色。爰に上方へ卒塔婆をたて、お關、網代笠、黒の衣にて、後向きにて木魚を打ち居る。下手に旅乗り物を擔がせ、半天、股引、大小、旅形の若黨四人。紺の看板、柿の脚絆の旅中間四人、雲助五人、荷物その外持ち鎗、挟み箱、合羽籠、その他侍ひ大勢附添ひ、行列三重、時の鐘、波の音、鶏の聲、夜明の體にて幕あく。

若一 各々、もう何時でござるか。

若二 最早夜明に間もござるまい。

若三 随分ともに道中筋を

若四 心付けて、御合點か。

皆々 心得ました。

若一 コリヤ、人足ども、荷物に遅躰なきやう、大切に持參いたせ。

人足 かしこまりました。

皆々 お立ちく。

ト乗り物を昇上げ、上の方へ行かうとする。件のお關、卒塔婆を持ち、ひさくをふつて乗り物へさし寄り、物乞ふ體。

若一 慮外な乞食め。下がれく。下がらぬか。

ト引退げんとする。お關立廻りあつて

若二 エ、下がれといふに

皆々 慮外なやつ。

ト皆々圍ふ。乗り物の内にて

丈左 者ども、しづまれ。

皆々 ハア。

ト駕籠を据ゑる。戸を開かせ丈左衛門、内より思ひ入れあつて
丈左 慮外ものとは、この修行者か。

若一 左様でござりまする。お駕籠へ近よる乞食めゆゑ、引退けますれば
三人 手向ひ致す無禮者。

丈左 笠取捨て、面あらためる。
若黨 ハツ……乞食め、笠を

ト兩方よりかゝる。立廻つて笠は落ちる。藁で束ねしそぎ尼のかづら。
彼奴めは女の

皆々 修行者だな。
ト丈左衛門、よくく見て

丈左 女は正しく山崎氏の娘のお關、ハテ、變つた形で
せき お目見得いたすも面ぶせ。倉岡様、お恥かしう存じまする。

丈左 すりや、只今では尼となられて
せき 親と夫の菩提の爲、その上忰も姑も、非業の刃に是非もなう、髪もおろして墨染の、この修行

者に倉岡様、一錢二錢のお手の内、合力なされて下さりませ。

丈左 すりや某に手の内願ふか。以前のよしみに合力は
皆々 とらしてやらうワ。

せき 倉岡様が修行者へ
丈左 手のうち取らさう……その手の内は

ト近寄つて抜きかける。お關立廻りあつて、持つたる卒塔婆を丈左衛門が目先へ突出す。
皆々 こりや手向ひか。

せき 全く手向ひ致さねど、倉岡様のお手の内、この戒名の佛へ何とぞ
ト卒塔婆を持って立ちかゝる。丈左衛門立廻つて、よくく讀んで

丈左 俗名三作……すりや、仕置になつた
せき 夫の戒名、裏に記せし

ト引かへして見せる。丈左衛門見て。
丈左 劍消玉貌信女、應永三年八月中の六日……即ち今日。この戒名は何者のだ。

せき ハイ、即ち私し。

丈左ヤ。

七七四

せき 俗名即ちこの關が、お前のお手にかゝるは承知、お待ち申してこれまでの、親と夫が側杖に、共に死にたき身の願ひ。命を水の泡とのみ、刃に消ゆる草の露、蟲もあはれの貫ひ泣き、目には居花の野邊送り、あなめのむかし思ひやる、死なぬ先からこの卒塔婆、建て置きましてわたしが願ひ、不便と思つて倉岡様、勝負なされて下さりませ。

丈左 すりや某を、敵と存じて討つ心か。

せき 天下の成敗是非なくも、重ねぐの親夫、とても事に私しも、あなたのお手に

丈左 かゝる所存か。

せき いかにもお手に

四人 曲者、やらぬ。
ト窺ひ寄つて、持つたる卒塔婆、仕込みにて、手早く引ぬき、倉岡が眉間を切り破る。

ト一度にかゝり、立廻りにて墨衣をひきぬく。下は白無垢の四天へ、南無阿彌陀佛と墨書して、淺黄のしごきにて腹帯して、白股引、リ、しき形になり、切り立て、丈左衛門へ立ちかゝる。兩人立廻りあつて

丈左 切り捨てろ。
皆々 ハッ。

ト双盤になり、丈左衛門はじめ皆々、ひとまくしに入る。若黨四人抜きつれてかゝる。お關よろしく切りちらす。これより段々お關へかゝり、立廻りあつて、皆々手を負ふ。丈左衛門鉢巻釋りしく、槍を持つて突いてかゝり、鳴り物變つて兩人よろしく大々テあつて、トお關危く見える。この時禪のツトメ、向うより長吉、長五郎、リ、しき形にて走り來り、丈左衛門を引退け、お關を圍ひ

長吉 姉者人か。

せき さういふお前は

長吉 知らぬ事として入替へ子、誠はこの長吉は山崎與五郎、親の敵の丈左衛門。

長五 その助太刀は長五郎、親の家名を南與兵衛。

兩人 天命のがれぬ、覺悟しろ。

丈左 小癩な奴の。

せき 親と夫の

ト切つてゆく。立廻りあつて丈左衛門を一太刀切り、立ち身にてお關をぐる。

七七五

長吉 首尾よく本望。
長五 せき思ひ知つたか。
皆々 動くな。

ト旅侍び大勢取巻く。

先づ今日はこれぎり、めでたく。

打出し

大正十四年六月十五日印刷
大正十四年六月十八日發行



『大南北全集第八卷』

非賣品

坪内逍遙

編纂者

渥美清太郎

發行者

和田利彦

東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷者

上村新輔

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所

博文館印刷所

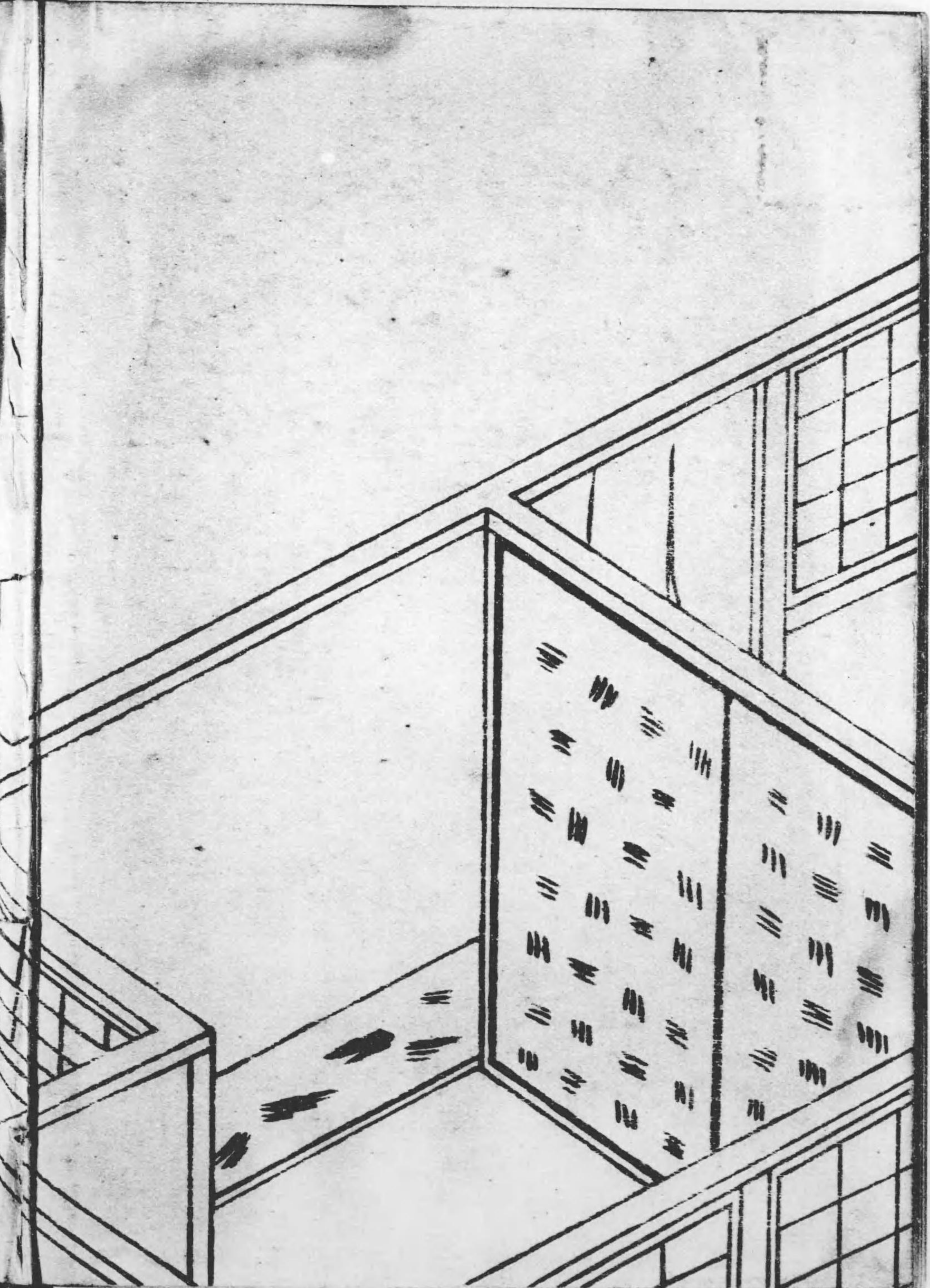
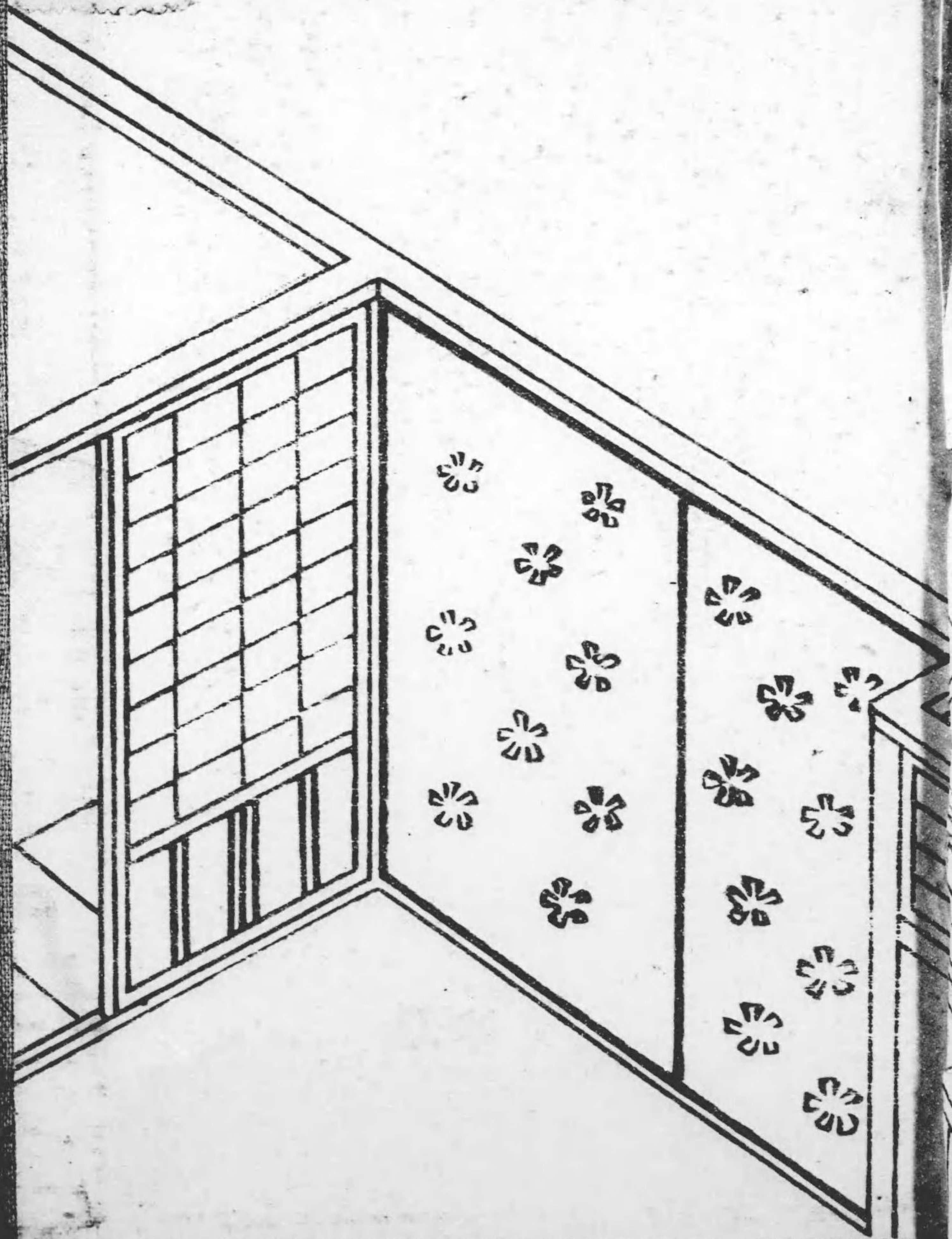
東京市小石川區久堅町百八番地

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行所

春陽堂

539
81



終

